

北支鷲兵团

戦病を克服し

兵庫県 林 繁 實

私は大正九（一九二〇）年十一月二十七日、鳥取市吉方町で生まれました。母は私が二歳の時に死亡、父も十六歳の時に死亡してしまい、その後は私が八十八歳の祖母を養っていました。

朝日新聞の見習記者の時、軍の記事を取材しましたが、忘れられないことは、四〇二人の戦死者の家庭を訪問して、それぞれの方の記事を書いたことで、今でも全部をスクラップに持っています。その当時は若くして記憶力も良かったので、今でもいろいろの記事というか、戦没者遺族の方々の言葉や気持ちを忘れられません。

兵隊検査では第二乙種でしたが、第一補充兵役に編入されました。昭和十四（一九三九）年十二月十日、

鳥取の西部第四十七部隊（第十師団管区）に召集されました。現役兵と同じであったのですから、同年生まれの者では早く軍務に服したのです。

三カ月の初年兵教育を受け、一期の検閲の時は、師団長の統率方針を突然参謀から聞かされ、「獅子心中の賊を掃滅すべし、とあるが何か」という問に対し「不平不満・私利私欲のことであります」と答えました。その時、全員の前で参謀から誉められ面目を施しました。

昭和十五年四月、宇品から北支の塘口へ上陸し、泊、翌日、順徳へ行きました。石家荘（石門）に山本中隊があり、匪賊討伐に出ていた「鷲部隊（第一〇師団）」でした。

一カ月、現地で訓練を受け、昭和十五年五月初旬、中原作戦があり、吉田峯太郎旅団長からの激励の言葉を緊張して聞いたことを覚えています。

その山本中隊は、戦死傷者収容（担架）訓練を受け、各地で戦死傷者の収容をしていました。石家荘か

ら大原、臨汾へと南下しました。貨車に乗せられ、その途中途中で給与を受け、麦の成長を見ながら、大陸は広いなあと思いました。

作戦は五月二十日頃終結したのですが、毛家湾と言う所で、私は目がククラして体調を悪くしました。ドラム缶風呂に入ったのですが体温は四十度となり、戦友に背負われて、臨時の野戦病院の大きな天幕の中に収容されました。その時、意識は不明、血便が出たので農家に移され、意識がもうろうとしているためか、暴れまくっている（自分では記憶は無かった）ので、手足を全部縛られていました。その前、戦闘の時、八路軍の少年兵が私を見て彼が手を合わせているので、助けたことがあったのです。その結果が、これからお話をすることと関連するのではないかと思われるのです。

六月一日東鎮から、臨汾の野戦病院に後送されました。その時、皆が「林は死ぬ」と言っていたらしいのですが、それまで食事をとれなかったのに、ある日、

粥を食べてから元気を回復したのです。昭和十五年七月七日、支那事変勃発三カ年の記念の日、大原から天津の病院に入りました。そこへ、天津にいた伯父夫妻が見舞に来てくれ、まさに地獄で仏に会った気持ちでした。なにしろその時はまだ、担架で運ばれていた時です。その病院に上原謙、高峰美枝子が慰問に来たことが思い出されます。

欧州では独ソ戦が始まり、世界の各地で何かが起るのではという予感がし始めた頃の九月十五日、私は秦皇島から出発し内地送還となり、姫路城の所にあった病院に入院しました。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が勃発し、その四日後に退院を命ぜられ、鳥取へ帰れるかと思ったら姫路の第四十六部隊に復帰させられ、一週間後、潮見山で対空監視をしていました。その頃はまだ病氣も完治していません。完全軍装での山の登り下りは苦しく、銃剣で喉を突いて死にたいくらいでした。第四十六部隊で召集解除まで初年兵教育をしていたため、昭和十七年十一月二十五日、上等兵にて召集解除、一

年三カ月の軍務を終えたのです。

その間の思い出は、連隊の正門衛兵勤務中、「ネズミが火をくわえ弾薬庫へ入ったらどうするか」と、巡察の将校に問われたこともありました。その答えは「……」。今でも何と言えばよいのか、と苦笑することがあります。青野ヶ原での秋期演習中、中部軍・片岡四八中將の茶菓の接待をしたり、中隊長の当番もしたりで、随分上官に可愛がられました。

召集解除後は伊丹の会社に勤めていたのですが、昭和十九年三月二十三日、召集ということになりました。入隊の前の晩、結婚の話がまとまり、簡単な式を挙げ、翌日の午後入隊しました。その晩は、数人の人々が私同様の結婚式を挙げたということです。

内地から釜山港を経て北朝鮮の咸興第四十三部隊へ入ったのですが、動員過剰のため一時は馬中隊に入り、その後小銃中隊に配属になりました。その日、人事係准尉から「この中で印刷が出来る者はいるか」と言われたので、私は本部で謄写版の秘密文書を刷って

いたので申し出て、その間、朝鮮の兵隊の基礎教育の助手を二度しました。

その後、村川正一大佐の部隊にりましたが、和田軍曹に、私が精勤章を三本持っていたので、連隊長の当番を命ぜられ勤務していました。連隊長はその後、千葉の歩兵学校へ行かれたので、さらに当番を続けることとなりました。

大田の旅館から、連隊長について釜山に行きました。私は部隊を離れ残留ということになり、いよいよ済州島で全滅かと覚悟をしていました。

その後、副官の下で松の木の伐採を朝鮮の婦人へ手伝わせていましたら、八月十五日終戦となり、天皇陛下の放送を聞き、残念無念でした。部隊は今までとは変わり、教育した朝鮮の兵隊は全部即刻解除。日本の警察官も日本へ帰っていきました。

我々は百円と靴下三足をもらい、軍隊手帳を焼き、十月二十八日、米軍の上陸用の船に乗り、佐世保に着いて海兵団の兵舎に泊まり復員しました。

その後、伊丹の会社に六十歳まで勤務し、老人会や厚生年金の役員、全国表彰も受け、謡曲連合会の会長などを務め、現在に至っています。軍隊に入る前に、軍人勅諭は全部覚えたり、軍人としての任務も真面目に務めました。北支での戦病により、心ならずも内地送還、内地勤務、召集解除ということは、私の本意に反する軍隊生活でした。

しかし、同年兵や戦友の多くは、第一一〇師団として北支での基幹部隊となり、共産八路軍と戦ったり、河南、京漢作戦で多くの戦功を挙げると同時に、戦没、戦傷病者も多数おられます。私は、幸か不幸か内地勤務となったため、生を得て今日あり、戦後日本の復興に尽くすことが出来たことを幸せと感じています。と同時に、戦没者の霊に心から哀悼の意を捧げる日々です。